大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

渡辺さんと鍵(渡辺知也さんを送る)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古林, 清一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/2692

対してもおそらく失礼な物言いが多々あったと思うのだが、温厚な教授は大人（たいじん）の風格で受け止めてくださった。この場を借りておわびと感謝を申し上げる。

12年前上海に留学していた時に楽しみにしていたテレビドラマがあった。ドラマは毎回こういうナレーションで始まった。

「包囲された城の中の人は外へ逃げたいと思い、城の外の人は中へ突入したいと思う。結婚に対してであれ仕事に対してであれ、人生における願望はたいていかくのごときものである。」

今にして思えば、当時の私はこの言葉の本当の含蓄を味わうことはできなかったが……

渡辺教授はまもなく「城」の外へ行かれるが、中にいらっしゃろうとも外にいらっしゃろうとも、悠哉游哉、きっとゆったりとかまえていらっしゃるのではないか。それでこそ文人のあるべき姿だろうと小心者は思う。

渡辺さんと鍵

古　林　清　一

渡辺さんから受けた教えとして一番、強く印象に残っているのは、彼が研究室に対する施錠を全くしないことです。このことは、一般的にはルースであるとか無神経であると見なされるかもしれませんが、私は卓見であると思っております。施錠をしないで毎日の生活をするということは、今でも日本の農村社会では一般に行われていることだと思います。いちいち施錠して生活し、自分も他人も規則によって縛られ、神経をとがらせて、起こりうる不安にとりつかれて生きる人間の姿こそ渡辺さんから見れば愚かな人間の姿であります。

鍵によって身を守って生きている人間こそは現代管理社会のもとで管理された病理的人間のありかたであります。そういう人間の威張っている社会よりは、たくましく元気な人間の生きている社会のほうがまともであると言えます。人間の一生は短く、一瞬のことにすぎません。限られた人生を生きる我々は、規則やルールに気を使い、これらを自己目的と見なすのではなくてこのような人為的約束事を相対化して生きるべきでありましょう。